

# 森山開次「ラ・ボエーム」 出会いは宝

ダンサーで振付家の森山開次が、井上道義率いるブッチーニのオペラ「ラ・ボエーム」を演出する。振り付け、美術、衣裳に至るまで「君の好きなように。新境地をひらけ」と、井上からほぼ全権を託された。引退を控えた井上への、はなむけの真剣勝負となる。



井上道義

全国の劇場や芸術団体等が連携し、オペラを新演出で制作する「全国共同制作オペラ」の一環。

2009年にスタートし、井上の指揮、野田秀樹演出の「フィガロの結婚」などを上演してきた。今回は7都市で計8回上演する。

井上と森山の初タッグは、同企画で上演された19年の「ドン・ジョヴァンニ」。主人公の途方もない色香や吸引力を、ダンスでどう心地良く醸し出すことができるか。舞台全体を女性の体内に見立て、骨盤の形のいすを置いた。

「あの時は、舞踊でオペラを乗っ取ってやるくらいの気持ちだった」が、今回の森山の心境は少し異なる。東京パラリンピックで開会式の演出という大役を経験したことが大きいと感じている。「障害のある人たちのそれぞれの思いを受け止め、いろんな人や文化に出会うことができた。今回は、僕自身の人生に積み重なってきた宝物をちりばめてみたい」

出合いを自分の中に取り込めるのが、ダンスに携わる幸福と語る。昨年には宮沢賢治の「雨ニモマケズ」に想を得た創作舞を能楽師の津村禮次郎、片足が義足のダンサー大前光市と3人で踊った。それぞれの空気を瞬間的に吸収し、全く異なる個性を、緩急自在な動きで柔らかく編み上げた。

「ラ・ボエーム」では画家、音楽家、哲学者、詩人の若者が、葛藤しながらそれぞれの夢を追う。

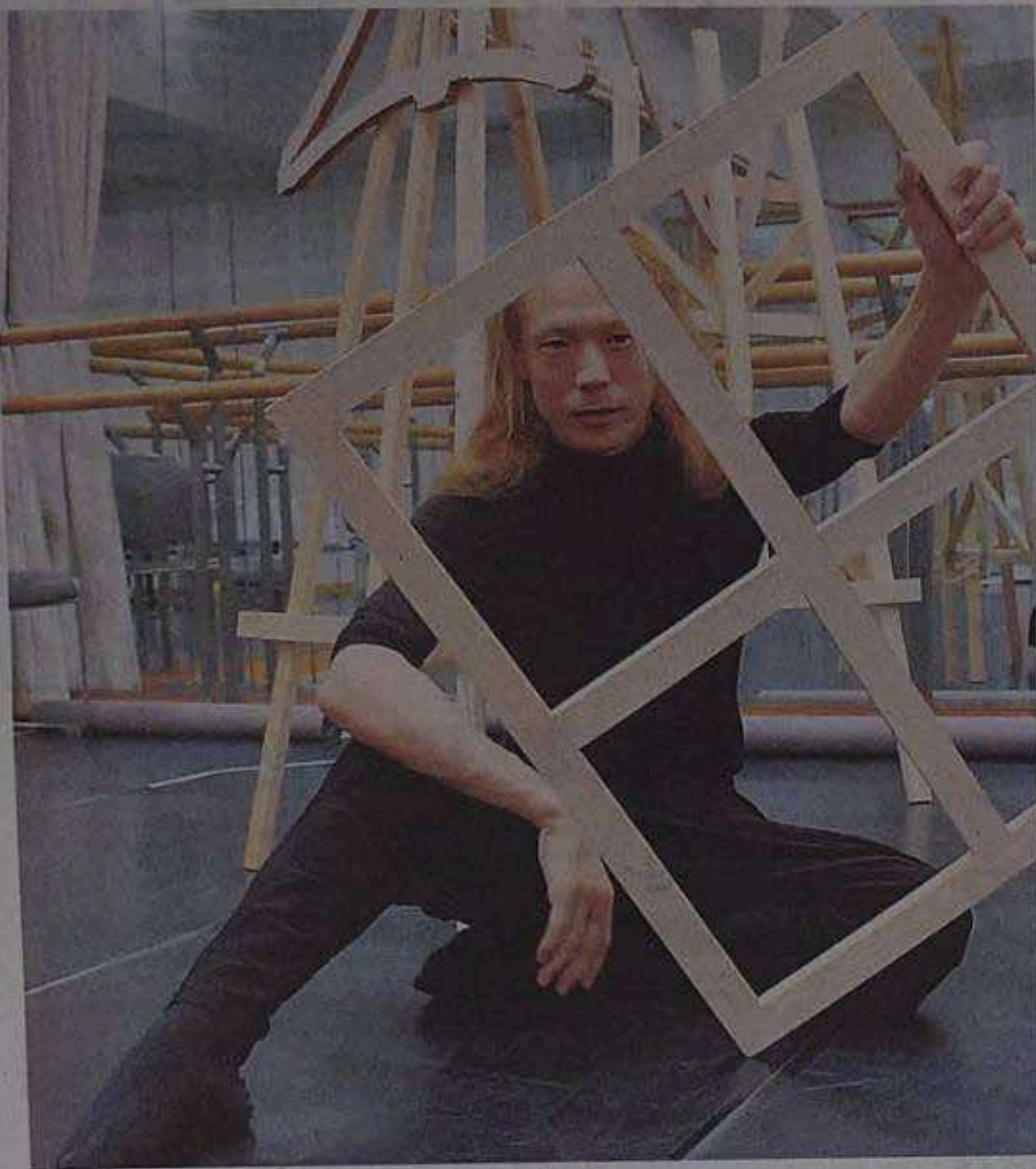
## 新演出 指揮・井上道義へはなむけ

## 東京パラの仕事経て 人と音楽と結び合う

青春の特権だ。4人が共に暮らす屋根裏部屋に、ダンサーである森山自身が紛れ込む。そんなイメージがおのずとふくらんだ。打ち合わせで頻繁に訪れる井上の家も、そんな「屋根裏感」にあふれている。「いろんな国のガラクタやお面やお土産があって、子供の秘密基地みたい。ここで井上さんの童心が日々育まれ、それがあの自由な音楽の礎になっていく。だから井上さんが最後に『ラ・ボエーム』をやりたいと思った気持ち、僕にはよくわかる」

若い頃、音楽に嫉妬した。「音楽は、ダンスより先に観客に届くから」。音楽がなくても踊ってみせる。しかし、無音で踊れば踊るほど、音が欲しくなり、気付けば自分の心臓の音で踊っていた。さまざまな音楽家と共演を重ねた今は、素晴らしい音楽に出会うことがダンサーの喜びと思える。今回も、歌手、オーケストラに合唱、それぞれとの出合いから得る何かを、絶対に逃さずつかまえた。「みんなと丁寧に出会い、すべてのコミュニケーションを大事にする。それが、本番で大きく飛翔するための巨大な踏み台となる。僕の仕事は、誰一人乗り遅れないようにみんなを舞台へと連れていき、井上さんが運転する夢の超特急に乗せること。その瞬間、みんなのモチベーションも上がり、きつと奇跡が起きるから」

(編集委員・吉田純子)



◇21、23日、東京芸術劇場▽29日、宮城・名取市文化会館▽10月6日、ロームシアター京都▽同12日、兵庫県立芸術文化センター▽同19日、熊本県立劇場演劇ホール▽同26日、金沢歌劇座▽11月2日、ミュージア川崎。いずれも午後2時。